

○ 中学生の部 最優秀作品



地域の安全とは

いわき市立平第一中学校 1年 鈴木 怜

私の家の隣に住む根本さんは、とてもパワフルだ。声がとにかく大きい。そして明るい。年は八十歳。一人暮らし。私と妹は、この夏休み期間中ずっと、根本さんが自宅の庭で育てているトマトやナスをいただけることを楽しみにしていた。

「隣りの根本ですー。」

という声が聞こえると、何をしても走って玄関先へ向かう。ナイロン袋に入った真っ赤のトマトを受け取ると、私と妹は笑顔でお礼を言う。根本さんも口を大きく開けて笑う。そこで、私の母は根本さんに夕飯のおかずを手渡すのだ。根本さんの夕飯は六時と早いので、常におかずができあがっているわけではない。その時は、私や妹を連れて行き、話をし、六時に間に合うように帰ってくる。それが日課になっている。母なりの工夫で、いただいたナスのみそ炒め、肉じゃが、すき焼き、天ぷらなど、一人暮らしの根本さんが作れないだろうやわらかめのおかずが並ぶ。時には、家族のことより根本さんのことを考えて夕食作りをするくらいだ。

実は、そのようなやり取りはずっと前からではないのだ。令和元年の東日本台風で、夏井川が決壊し、私の家の一階部分も根本さんの平屋の家も大雨の被害に遭った。私達が朝起きた時には目の前の風景が一変していた。根本さんは、増水した時には外の扉がすでに開かず、屋根板を頭で壊して一夜を過ごしたのだそうだ。

そして、これ以上増水したら死ぬかもしれないとまで考えたそう
だ。その話を根本さんから聞いた時、私も家族も心を傷めた。何
かできることはなかったのかと思う毎日だった。急な増水で他を
気にする余裕はなかったとは言え、増水前に根本さんを家に呼び
入れる声掛けができたのでないか、と反省が残る。そして、その
声掛けは非常時にだけでなく日頃からの声掛けから始まるもの
だと気付いた。

そのような体験から、根本さんと私達の交流が続いている。お
互いに目になってあげる事、他愛のない会話から、近所どうしの
安全となり、その延長線上に私達が住む地域の安全につながって
いくのではないだろうか。

根本さんは今日も、小学生の登校班の見守りを毎日続けている。
小学生よりも大きな声で「おはよう」と言う姿は、カッコ良いの
だ。大きな声であいさつし合える平窪の地域に悪い人はいないと
信じたい。私も、学校では規律委員としてあいさつ運動を行って
いるが、さらに目的意識を持って取り組めたら良いと思う。根本
さんのように、私も地域を守れる一員でありたいと思う。そして、
あいさつを通して安全な地域づくりにつなげていきたい。私がま
ず、行動を起こせば、みんなが当たり前になり、犯罪を防ぐこと
ができたらいいな、と思う。犯罪を起こす人が恥ずかしいと思う
ような平窪にしたい。

